論説

題字・松田 明子（藤島高）
カット・神内 八重

大野地球科学研50年目

在野の探究 世代超え継承

大野市を拠点に地球科学の研究に励んでいる市民グループ「大野地球科学研究会」が、現名称になり50年目を迎えた。天文、気象、地質、生物の各分野で活動し、福井県が「恐竜王国」となる礎を築く化石発掘調査に協力するなど、半世紀にわたって果たしてきた功績は大きい。地学好きの在野のメンバーによる探究が、今後も継承されるよう期待したい。

ルーツは、大野高の地学部出身者8人で1973年に結成した「大野地球科学趣味の会」。77年に現名称に改称し、大野市内で月1回の定例会、年1回の総会を開き情報交換を続けている。現在は20～80代の男女21人が名を連ねている。

天文分野では観望会や星空の出前授業、全国から研究者が集まる「彗星（すいせい）会議in大野」などを開催し、気象分野では豪雪の影響などを分析。地質・古生物の分野では1970年代、同市和泉地区で専門家の調査を案内し、国内最古の三葉虫化石が見つかった。80年代には会員が勝山市の手取層群北谷層でカメの甲羅やワニの歯の化石を発見。後の県の調査で恐竜化石が続々と見つかり、県立恐竜博物館の開館につながった。4代目会長の川田信行さん(69)は「会員の地道な活動が、恐竜化石発掘の下地となった自負がある」と胸を張る。

県の本格的な化石発掘調査が始まる前から採集した岩石や化石は数千点に上る。大野市内の保管場所には、研究の参考にしようと各地の大学などの専門家が次々と訪れるという。同会は節目に合わせ化石や岩石の資料をデータベース化し、公開可能なものはホームページに掲載する方針だ。さらに専門家から頼りにされ、さまざまな研究に寄与する期待が膨らむ。

川田さんと初代会長の前田裕一さん(77)が「損得勘定抜きの信頼関係のおかげ」と口をそろえるように会員は農家や会社員、自営業、元公務員など公的研究機関に属さない在野のメンバーが中心だ。手弁当で調査に励み、研究内容を報告し合う。各分野で県や市のアドバイザーや一般向け講座の講師を務める会員も多く、生態系の変化を示す資料展や「星空保護区」の発信に民間レベルで一役買ってきた功績は大きい。

ここ数年で20～30代の会員が加入。3月下旬の総会では古参メンバーと若手による活発な意見交換が深夜まで続き、懸案だった世代交代も徐々に進んでいるようだ。くしくも50年目に入った今春、県立大恐竜学部の勝山キャンパスが開設された。前田さんと川田さんが言う「地球科学の研究の宝庫」である奥越地域をフィールドにして今後、世代や組織を超えた新たな交流が生まれるかもしれない。

2026.4.10

福井新聞
© 福井新聞社 無断複製・転載を禁じます